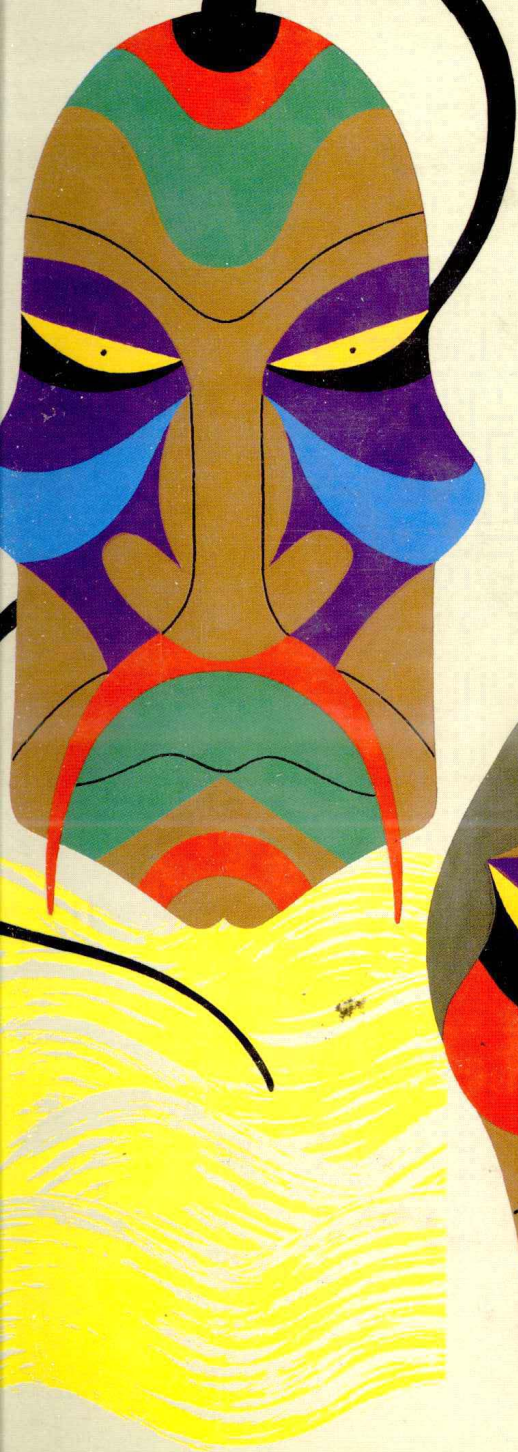


ゼーランジャ城

の侍

新宮正春





ゼーランジャ城の侍

新宮正春

新人物往来社

〈著者略歴〉

新宮正春（しんぐう・まさはる）

昭和10年、和歌山県新宮市に生まれる。神奈川県大田区出身。昭和39年、報知新聞東京本社に入社。巨人軍担当記者当時の昭和45年「安南の六連銭」で第15回小説現代新人賞受賞。主な著書に「鷹たちの砦」「不知火殺法」「陰の剣譜」「忍法鍵屋の辻」「後楽園殺人事件」「殺しのマウンド」「信玄狙撃」など。

検印省略

ゼーランジャ城の侍

一九八九年四月一五日 第一刷発行

著者 新宮 正春

発行者 菅 英志

発行所 新人物往来社

東京都千代田区丸の内三―三―一（新東京ビルディング）〒一〇〇
電話東京（二二二）三九三一（代表） 振替東京六一―五一六四三

印刷所 文唱堂印刷

製本所 小高製本

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません。

ゼーランジャ城の侍／目次

第一章	甘い石塁……………	七
第二章	鉄人隊……………	四四
第三章	長衣のひと……………	八〇
第四章	火の槍……………	一二〇
第五章	鎌倉英勝寺……………	一二三
第六章	捨てかまり……………	一四四
第七章	青銅砲……………	一八三

第八章	血脈		二〇
-----	----	-------	----

第九章	クルスの印籠		三〇
-----	--------	-------	----

第十章	灼けた箭		三二
-----	------	-------	----

第十一章	花飾り		三六
------	-----	-------	----

装幀／玉井ヒロテル

ゼーランジャ城の侍

第一章 甘い石塁

一

じゃがたら万吉は、不意に足をとめた。

潮のにおいに混じって、烟脂タバコがくすぶるような異臭をかいだからである。

(火縄ヒユが……)

反射的に万吉は片膝をつき、目深にかぶっていた兜ヘルムの鍔ツバをかたむけて、風上をすかしみた。からだの重みで、鍛鉄の膝当てがきしみ、もうい煉瓦の角をすりつぶすのがわかる。膝をつくと同時に、万吉の手はするりと音もなく長剣を抜きはなっている。

レピア、と呼ばれる両刃の剣である。鋼鉄製の椀型の柄と、甲を保護する護拳がついている。風がある。

異臭は、くろぐるとそびえる東北のフリッシンゲン稜堡の方角から漂ってくる。

台湾島の南岸の砂州のうえに築かれたこの城は、オランダ人の故国からとってゼーランジャ城と名づけられている。基部を石で積み上げ、さらに煉瓦を置いた最上部の胸壁部分だけでも、周

圓約五百フート（百六十メートル）あつて、四隅に鑄鉄製のゴテリング砲を備えた堡壘が設けられている。

四つの堡壘には、それぞれゼーランドのワルヘレン島の四つの町の名がついていた。フリッシンゲンも、そのひとつだった。

旧教主国スペイン、ポルトガルを駆逐して、東南アジアの制海権をほぼ手に入れたオランダの東インド会社にとって、台湾にあるこのゼーランジャ城は、ジャカルタと日本との中継基地としても、きわめて重要な位置を占めていた。

じゃがたらの方吉は、この夜、もつとも海に近い北側胸壁内の通路を立哨中だった。

鏢つきの兜は、方吉たちのような傭兵に城側から支給された、いわば官給品だった。

その帽^{フット}子をかぶりなおし、方吉はにやりと笑った。

胸壁の蔭に、大尉のフォン・デル・ハーヘンがうずくまっているのが見えた。暗闇のなかにぼつと赤くともった火縄の明りが、特徴のある黄金色の頬髭を照らしだしている。

ハーヘンの手のひらに載っているずんぐりとした円盤状の物体は、明の水軍で震^{しん}天^{てん}雷^{らい}と呼ばれているものである。鑄鉄製の円盤のなかには、強力な火薬と撒^{まき}菱^{びし}がつまっついていて、導火線に点火して敵中に投げ込むと、菱形に尖った鉄片が四散する。

火縄がいぶる異臭のものは、この震天雷だった。

（そうか……）

方吉には、即座にハーヘンの策が読めた。

先刻から、この北側の胸壁だけ炬火を消したのも、おそらくハーヘンの指図だったのだろう。鹿耳門、と呼ばれる狭い湾口に面した北側の胸壁は、すぐ下が海になっている。石と煉瓦を積み上げた二層の壁は、それぞれ三フアーデム（六メートル）ほどの高さをもっている。

ハーヘンは、わざと炬火を消してその胸壁の一部を暗闇に塗り込め、そうすることで敵の夜襲隊をひきつけようとしているに違いない。

が、明らかに異とわかつていて、そこに飛び込んでくる無謀な兵は、敵の鄭成功軍にいるかどうか。ハーヘンは、万吉にとって上官だが、ゼーランドの農夫（ブッセル）あがりらしくこういう見え透いた手しか打てない。が、その単純さがかえって効を奏することもある。

万吉の鋭い耳は、胸壁の石に当たるにぶい物音を聞き漏らさなかった。

細い棕櫚縄が、目の下の闇からすると伸びてきて、その先端にむすびつけられた碇が胸壁の溝を嚙んだ音だった。

「お前……」

ハーヘンは、押し殺した声で万吉を呼ぶと、親指を下に向けた。

胸壁の下に敵がいる、という合図である。

足元から胸壁に沿って深い闇が落ち込んでいて、白く砕け散る波頭がなければ、海面は判別つかない。

北は、新港の方角である。

「わかっている」

万吉はハーヘンにうなずいた。

胸壁の上は、青銅砲を二門移動させるだけの幅がある。あちこちに、まるい砲弾ロケットが小山のように積み上げられていて、先日、鄭軍の砲撃で破碎された箇所には、甘蔗の空き籠に砂や石を詰めた堡籃ぼらんで補填してあった。

その通路だけは、東側の炬火の明りである程度はもののかたち分かる。

（来たな）

胸壁の溝に食い込んだ棕櫚繩がびんと張られるのを見て、万吉は背を曲げたまま、すばやく位置を変えた。

胸壁をよじのぼってくる相手の左手にまわりこむのが、こうした場合の玄人のやりかただった。右手に得物を構えた敵は、つかまった繩が邪魔になってどうしても死角をつくる。

棕櫚繩の先にむすびつけられた小さな碇型の鉤には、音を殺すために鹿の生革が巻かれている。

万吉は兜を脱いで、胸壁の隙間からそつと下を覗いた。

くろぐろとした海面に、ジャンクよりひとまわり小型の艤舸ばんかが二艘揺れている。その小船が、波に持ち上げられた瞬間、白磨きの兜らしいものがぎらっと光を反射した。東側の胸壁の炬火の列が、角度によって低い海面上のものを照らしたのである。

白磨きの鋼をつかっているのは、明軍の兜にきまっている。

（斬るか……）

長刀を持ち替えて、万吉はくちびるをなめた。

どすつという、こもった音がした。

すぐ下の鰐舩から伸びてきた棕櫚縄のほかに、やや遠くの鰐舩からも、もう一筋の縄が投げ上げられた音だった。

（あいつは、なにをぐずぐずしておる）

万吉は、震天雷の火縄を吹いているハーヘンに合図を送るため、胸壁の銃眼から離れた。

刹那――。

胸にかかえなおした鋼鉄の兜が、乾いた音をたてた。

先刻まで万吉の頭が突きでていた狭い空間をななめに貫き、ひと筋の箭が飛んできたのである。もしも兜を胸にかかえなおさなかったなら、箭はまともに万吉の胸を射抜いていただろう。

箭の角度から考えるまでもなく、それは真下の鰐舩から射られたものだった。

先端に、短い篋がついている。

見なくとも、その箭は剽悍な麻豆の部族が使っているもののは分かっている。

独特の彫刻のある鹿骨の鏃が、兜に当たってはね返り、煉瓦をしきつめた胸壁の通路に落ちた。それを拾い上げて、万吉はハーヘンの方をすかし見た。

「早うせんかい」

思わず万吉は、舌打ちした。

ふた筋の縄をよじのぼっている敵は、すくなくとも六人はいる。

その六人とはべつに、うねる海面上の二艘の艀舩には、まだ三人ずつ裸身の男たちが残っている。そのうち、万吉に箭を射かけてきた麻豆の男は、漕ぎ手と射手とを兼ねているらしく、二の箭をつがえて胸壁を見上げている。

首のあたりで切り揃えた頭髪が、万吉の目にはいった。

「大尉！」

大声でハーヘンに警告しつつ、万吉は長剣をかざした。

真っ先に縄を伝つてのぼってくる男は、月代を剃り上げていて、放胆にも禪ひとつの裸身だった。頭のとっぺんに鎖籠手のようなものをぐるぐる巻きつけ、背に日本刀をせおっている。

倭寇特有の剽悍な戦術だが、それにしても無謀すぎる。

(これが……)

鄭成功の軍に雇われている、鉄人隊と称する倭人のひとりなのは間違いない。

まっさきに縄をよじのぼってきた月代の男の動きは、すばやかだった。

ほんのひと呼吸で、するするとのぼっていると、背中の刀に手を伸ばした。

万吉は、その男が吐く荒い息遣いを聞いた。

頭に巻きつけた鎖籠手が、海水に濡れて光っている。

胸壁の縁に片手がかかり、その指先がすぐ目の前に伸びた。さらに、指先は手掛かりとなるくぼみをまさぐった。

長剣を構えたまま、万吉はためらった。

と――。

胸壁につかまった月代の男の指先めがけて、横あいから幅広の長剣が振りおろされた。

いつ接近してきたのか、ハーヘンがものもいわずに、いきなり先に攻撃をしかけたのである。手首を断ち切った長剣は、勢いあまって胸壁に打ちこまれた。

ハーヘンの毛むくじやらの手に握られた剣から血がしたたった。

胸壁の向こう側で短い絶叫があがると同時に、ハーヘンはすばやく次の行動に移った。

火縄をぎりぎりのところまで燃焼させた震天雷を取り上げ、真下の鰐舩めがけて投げおろしたのである。鰐舩に火薬でも積んであったのか、震天雷ひとつの割に、爆発はすさまじかった。

白熱した光がはじけ、耳をつんざく轟音があがった。

海面を衝撃波が走った。

ちぎれた下肢が炬火の明りに照らされ、くるくると回りながら飛んだ。

爆発は、鰐舩の上にいた裸身の麻豆の男たち三人をこなごなに吹き飛ばした。

万吉は、肩で息をついた。

胸壁のこちら側に、ハーヘンの長剣で切断された手首がひとつ落ちていた。

三

じゃがたらの方吉は、切断されなかった方の手で胸壁にしがみついている月代の男を見た。

「く、くそっ！」

男は、倭語でわめいた。

わめきながら、男は血まみれの棒切れになった左肘を曲げ、それを胸壁と棕櫚縄のあいだにこじ入れた。

縄には足掛かりになる結び目があるらしく、男は肘と足を使つて懸命に這いあがろうとした。海面で燃えさかる艦舳からの照りかえしで、男の顔はよく見えた。

三十を過ぎたばかりのたくましい男で、筋骨隆々たる体軀の持ち主だった。男は無事なほうの手を持った抜き身を、胸壁のこちら側に突き立てようとしていた。

そうしながら、ちらつと万吉を見た。

「おぬしは、どこから来たぞ？」

と、男はちよつと驚いたように訊いた。

「……オランダに雇われとるのか？」

鏑つきの兜に、鋼鉄の胸当てというオランダの正規兵と同じ格好をした万吉が、じつは倭人なのが男にはわかつたらしい。

万吉は、その場にこおりついた。

じゃがたら、すなわちオランダの植民地であるジャカルタの暮らしが長かつた万吉は、オランダ語のほか倭人のことばもしゃべれる。

予期していたこととはいえ、夜襲をかけてきた相手から、不意に母国語で話しかけられて若い